



ソラン



金時 豆太郎

1 旅のはじまり

1 旅の始まり

むかしむかし、もっとずっとずっと昔。日本の国がまだ「ヤマト」とよばれていたころのこと。

七才になったばかりの男の子ソランは、お母さんのトモと二人で旅をしていました。お母さんが生まれて育った故郷の山の村を探して、何日も何日も、ただひたすらに歩き続ける旅でした。

夜の空に浮かぶ丸い月が、夜ごとにだんだん欠けて半分になり、やがて弓のように薄くなり、とうとうどこにもなくなってしまったと思ったら、花のつぼみのように少しずつふくらみ始めて、また瞳のようにまあい形になる。そんなことが、もう三回も続きました。季節はどんどん寒くなり、きっともうすぐ雪も降ることでしょう。

旅の始まりは、ソランの生まれた大きな村が、ほかの村との戦争に負けた時でした。母はソランの手を取って夢中で走り続けたのです。自分の家の草屋根が赤く燃えている様子は、ずっとソランの目に焼き付けられていました。

旅の途中にある小さな村や大きな村で、着る物や食べ物を分けてもらいました。どの村の人々も皆、やさしくしてくれました。その村で暮らすように勧めてくれる人々もいましたが、母は同じ場所に三日とはとどまりませんでした。少しでも早く故郷の村に行きたかったのです。

途中に人の住む村がないときは、夜の眠りのために雨や風をよけることができる場所を探します。大きな樹の穴の中や岩の影や洞窟で夜を過ごすこともありました。草で作ったむしろが暖かな布団になりました。

「母さん、これは食べられる？」

ソランは母にたずね、取ったばかりの茶色の木の実を見せました。ソランの体には草のむしろが巻かれていて、足にはわらで編んだ靴がしっかりとしばりつけられています。きょうは陽が照る暖かな日だったので、体に巻いているむしろが少し暑くて汗をかいていました。

息子が差し出した茶色い実を見て、母の両頬にはえくぼが浮かびました。

「あら、サルナシだわ。これは熟すと甘くなっておいしいのよ。わたしの大好物だわ。どこにあったの？」

「こっちだよ。川のところさ」

ソランはトモを連れて、少し坂を下ります。小川が流れる元気な音が聞こえてきます。

小さな川に沿って生えているカワラハンノキの枝に絡みつくように、サルナシの木のつるが広がっていました。数えきれないほどの実がなっています。

「キキッ」

ソランとトモが近づくと、小さなサルが二匹逃げて行きました。

「あっ、ごめん。驚かしちゃったね。少し僕らにも実を分けてね」

ソランはサルに声をかけました。二匹のサルは、少し離れたブナの木でじっとこちらを見ています。

黄色く紅葉した木の葉がまだ枝に残っていますが、風がふくといっせいに降ってきます。枯れ葉が地面の上に厚く積もっています。キツツキが木をたたき音が聞こえてきました。木の皮の中にある虫を見つけて食べているのです。

「もう寒くなるから熟した実が多いわね。袋に入るだけ取りましょう。こうやって食べるのよ」

母はそう言うと、柔らかそうなサルナシの実を丸ごと口にいれました。茶色の皮がつるっとむけて、緑色の甘い果実が出てきます。母は上手に皮だけを口からぷっと吐き出しました。ソランは母の様子を見て笑いました。

「母さん、子どもみたいだ」

「そうよ。子どものころからずっとこうやって食べていたのよ。故郷の村は山の中だったから、子供たちはみんなサルみたいに育ったの。だから森の中なら食べ物心配はないわ。木の实だけじゃなくて野草も食べられるし、土を掘れば木の根や草の根だって食べられるものがいっぱいあるのよ」

ソランも真似をしてサルナシの実を口に含んでみましたが、とても酸っぱくて顔をしかめてしまいました。

「ボクは先月、ハコネ山の中で食べたヤマボウシの赤い実のほうが好きだな。ずっと甘かったもの」

「甘いもあるわよ。これを食べてごらん」

母が差し出したサルナシの実をよく熟していて、少し酸っぱいけれど、とてもおいしいものでした。目を丸くしたソランを見て、トモも目を丸くして笑いました。

母のトモは、澄んだ小川の流れの中をのぞきこんで言いました。

「あっ、イワナかな。この時期には珍しいわね」

ソランものぞいてみると、意外に大きな魚が泳いでいます。黒っぽい体に赤や白の小さな斑点がついています。トモは木の枝で作ったヤスで魚をついて捕まえる名手でした。さっそく手頃な木の枝を探し始めました。以前にソランもまねをして魚をヤスでついたことがありましたが、体をさしぬかれて苦しむ魚を見ることが悲しくて、それきり二度としたことがありません。母が焼いてくれた魚はおいしくたべるのですけれども……。

ソランは、母さんと一緒なら安心だ、と旅の間に何度も思いました。

「今日は、ここで夜を過ごしましょうね」

あっという間に魚を四匹も取ってしまった母は、明るい声で言いましたが、その顔は少しくもっています。

「毎日ずいぶん寒くなって、もうすぐ雪も降るようになるかもしれないから、残念だけどこのまま故郷の村に向かうことは危険だわ。まだ道がよくわからないし、高い山を越えなくてはならないの。少しでも暖かい場所で冬を過ごして、春になったら行くしかないと思う」

「母さんの村には、母さんのお父さんとお母さんがいるんでしょう？」

「そうよ。きっと私たちを暖かく迎えてくれるわ。元気でいてくれればいいのだけど。それに……」

母は何かを思い出すような目になりました。

「それに、お兄さんのように私と一緒に育った人も、きっと待っているわ。会いたい」

強い風が吹いて、木の枝にしぶとく残っている木の葉を散らしました。

ソランは川原の大きな岩の影に場所を決めると、弓ときりを使って火をおこし始めました。弓の弦を巻きつけて、きりを勢いよく回転させるのです。すぐにきりの先から煙りが立ち始めます。そこに置いてある細かな木屑が熱くなるからです。もう少し木くずをのせてから煙に息をふーっと吹き付けると小さな炎がポッと灯ります。その炎をかわいた草に移せば大きな火になるのです。旅の間に、ソランは火起こしがすっかり上手になっていました。今日おいしい焼き魚が食べられそうです。夜の間に火をたくための薪（たきぎ）をもっと集めなくてはなりません。火をたいておけば体を温められますし、森の動物に襲われる心配もないのです。

魚は木の枝を突き刺して、たき火で焼きました。残り少ない塩を味付けに使います。大切に使っ

ている小さな土鍋で、母が集めたキノコを煮て熱々の汁物ができました。大きいキノコはそのまま焼いて食べます。すごく良い香りがしました。たくさんとったサルナシの実は好きなだけ、いくつも口に放り込みます。

食事が終わるころ、夕日が森の木の幹を赤く照らしはじめました。ソランとトモは急いで、夜の間に燃やすための薪を集めます。途中の村で分けてもらった草のむしろを二枚合わせて、トモは上手に袋を作っていました。母と子のそれぞれのための袋があります。夜はこの袋にすっぽりと入って眠るのです。荷物にはなるけれど、このむしろの袋がないと寒くて眠れません。

夜になると満月が森の梢を照らしました。耳を澄ますと森の小さなささやき声が聞こえてくるような気がします。ソランはたき火の火を見つめながらいろいろなことを考えました。戦争で死んでしまった優しかったお父さんや、もう二度と会えないかもしれない、村の仲間たちの顔が目に浮かびました。母のトモは疲れているのでしょうか、ぐっすりと寝ています。腰まであった黒髪をバツサリ切って、今は肩に届くほどの長さしかありません。

ソランは時々起きては薪を火にくべます。少し前までは母がそうしてくれたのですが、「僕がやるよ」とソランは言いました。母のトモが少しでも楽になってほしいと思ったからです。

虫の鳴く声が、川の水の流れる音と一緒にあって静かに夜の歌を歌っていました。時々フクロウの鳴く声が歌に加わりました。ソランはいつの間にか眠りに落ちていました。

☆

「さあ、今日のお話はここまでね。空歩（そらん）ももう寝なさい。おやすみなさい」

お母さんの智子（ともこ）は、息子の空歩の掛布団をそっと直してくれます。

空歩は、暖かい布団があってよかった、と思いました。お父さんはいないけど、お母さんと一緒なら安心だと思いました。何でもできる、空歩の自慢のお母さんなのでした。

お話の中のソランとトモはこれからどうなるのだろう……明日の夜がとても楽しみです。お話上手なお母さんって、いいものですね。

空歩は大きなため息をつくと、すぐに眠りました。そして、木の上でお母さん猿と一緒に抱き合って眠る子猿の夢を見ました。

2 フジミ村

2 フジミ村

母のトモと息子のソランの目の前には、広い海が広がっています。水平線の遠くには、島なのか半島なのかわかりませんが、緑の木の茂る陸が見えます。海風は冷たく、冬が近いことがわかります。砂浜を二羽の鳥がトコトコと歩いていました。

「ぼくたちみたいだね」

ソランは母に言いました。母は頬にえくぼを作り、黙って息子の肩を抱き寄せました。

遠くの砂浜に、貝を集めているらしい女の人が小さく見えました。長い髪を後ろでしっかりとしばっています。模様のついた暖かそうな服を着ています。トモとソランは顔を見合わせてから女の人に近づいていきました。

「あの、近くの村のかたですか」

トモがたずねると、夢中で貝をとっていた女の方は、すっと立ち上がって二人を見つめます。その人は少女のような笑顔をうかべた、おばあさんでした。それがユーカおばあさんとの出会いでした。

海辺から急な坂を上った丘の上に、二百人くらいが暮らす大きな村がありました。海を見下ろす台地の上に三十軒くらいの家が広場を囲むように建てられています。どの家も一部屋だけの、三角屋根の小さな住まいです。地面を腰の高さくらいまで掘り下げた広い竪穴（たてあな）に柱を立て、梁（はり）を渡し、かわいた草の茎（くき）を厚く並べて屋根ができています。

台地の木々を切り倒して大きな広場を作ったのです。広場を囲むようにカシの木やナラの木が残されて立っていますが、西側の木々だけはきれいに切られていました。その広くなった空に、フジ山がきれいに見えるのです。村の人々は朝に夕に、フジ山に向かって手を合わせ、村の安全を祈っていました。

《僕の生まれた村からは、フジ山がもっとずっと大きく見えたっけ。今、村はどうなっているんだろう。お父さんは戦争で死んでしまったし》

ソランと母のトモは一か月近く、この村に身を寄せていました。二人の身の上を知った村人たち

は親切にしてくれました。初めに海辺で出会ったユーカおばあさんが、夫婦二人だけで生活している自分の家に、ソランとトモを住まわせてくれました。夫婦の子供たちはみんな大きくなって、自分たちの家を建てて別に暮らすようになっていたのです。

「ソランの母さんは本当に働き者だのう。海から毎日どっさりと魚を取ってきたり、山からは食べられる山菜をたくさん見つけてくるのだから」

おばあさんのユーカが声をかけます。手は忙しく麻糸を紡（つむ）いでいます。

家の中は土間（どま）になっていますが、一面に草を編（あ）んだむしろが敷いてあります。小さな入口が一つと明かり取りのための小さな窓が一つあるだけです。柱と梁になっている太い丸太と、屋根の下地になっている細いたくさんの丸太が丸見えです。屋根の裏側も丸見えです。長い間に内側がすっかり黒くなった草屋根です。部屋の真ん中に火の燃える囲炉裏（いろり）がありました。

ソランは石臼（いしうす）の上でどんぐりの殻を割って、中の実を石で細かく砕（くだ）いていました。

「母さんは何でもできるんだ。泳ぎは村で一番早かったよ。小さいころから、おてんばだったんだって」

「あれ、そうかい。はははは」

ユーカは目を細くして少女のように笑いました。

「それで、ソランは何が得意なんだい？」

「うんと、なんだろう？ 歌うのが好きかな」

「そうかの。何か歌ってごらんな」

「うん」

ソランは好きな歌を歌いだしました。

さざ波の 寄する浜（はま）
朝往（ゆ）けば ハマナス咲き
夕往（ゆ）けば 昔を想（おも）う
父と母 いまいずこ
教えませ カモメらよ

「良い声だのう。でも、悲しい歌だのう」とユーカは言いました。

「えっ、悲しい歌なの？」

ソランは今まで歌の意味を深く考えたことがありませんでした。

「そうだよ。年を取って死んでしまった、お父さんとお母さんを思い出して歌っているんだよ」
「そうなんだ」

「人は年を取るとみんな元の土にかえって行くんだよ。だから生きている間にいっぱい動いて遊んで働いて、あちこちに足跡をいっぱいつけるのさ。そうすれば、どこかに一つくらいは雨も風も消すことができない足跡が残るかも知れないからのう。ほれ、その丸くなってるタマだって、あちこちに足跡をのこしておるよ。ははは」

猫のタマは名前を呼ばれて上げた顔を、丸めた体のなかに、すぐに埋（うず）めてしまいました。

「でも、たとえなんにも残らなくっても、きげんよく生きることができればそれでいいのさ。子供や孫と楽しく暮らせればなおのこと、神様にいっぱい感謝して、あとはゆっくり眠ることができるんだよ。だから本当はそんなに死を悲しまなくてもいいんだけどのう」

「ふーん。じゃあ、父さんも今は土になって眠っているのかな」

「そうだよ。ソランの父さんはソランという足跡を残してくれたのさ。感謝しなくちゃのう」

「ふーん。僕は父さんの足跡なんだ。僕はどんな足跡を残すんだろう」

「それはこれからのソランしだいさ。まだ知らない広い世界に行ったらいい。この海をわたったところにも人が住む世界があるよ、きっと」

ユーカおばあさんはソランを愛（いと）しそうに見つめて言いました。

「さあ、お手伝いはもういいから外で遊んできなさい」

「はい」

ソランはうれしそうに顔を輝かせました。

外は寒いけれど村の中央の広場には元気な子供たちがおおぜい集まっていて、にぎやかな声がひびいています。女の子たちは固まって羽根（はね）つきをしています。羽根とは、黒くてかたい木の種に鳥の羽を上手につけて作ったものです。細長い木の板を使って、この羽根を地面に落とさないように突きあうのです。女の子たちの服には赤や青の模様がきれいにつけられています。

年上の男の子たちは大人の男たちの指示を受けて、相撲（すもう）のための土俵（どひょう）を作っています。土を盛り上げてから、杵（きね）でたたいて固めます。何度も繰り返すと、しっかりした立派な土俵になるのです。この土俵から落ちるか、足の裏以外の体を土についたら

負け、という決まりになっています。毎年一回、寒い月に近くの村が集まって相撲大会を開きます。男たちの楽しみにしている、祭りのようなものです。今年はフジミ村が大会の場所になっていました。

「おい、ソラン。来いよ。こっちだよ」

マサトが声をかけてきました。ソランと同年の少年です。

「みんなで相撲しようぜ」

マサトの掛け声に近い少年たちが集まってきます。

「やろうぜ」

「よしきた」

地面に木の枝で丸い線を描いて簡単な土俵を作ります。五人づつに分かれて一組づつ対戦をします。年上の少年が審判を引き受けました。

「よーい。はじめ」という掛け声とともに試合が始まります。すばしっこい子供は丸い輪の中を右へ左へと駆け回って、相手のすきをついて押し出す作戦です。大きい子供につかまれたらひとたまりもありません。抱えあげられて土俵の外に投げ飛ばされてしまいます。ソランは、体は大きくありませんが腰が落ち着いて安定しているので、これまで何度か試合に勝っていました。でも、今回は九歳の、体の大きなカツヤと当たってしまいました。

互いに向き合って腰をかがめて待ちます。

「よーい。はじめ」

掛け声と同時にカツヤはソランに思いっきり体をぶつけてきました。もう少しで土俵から押し出されそうになりましたが、体をかわしてなんとかよけました。カツヤは両手を大きく上げて迫ってきます。ソランは力まかせにカツヤの腰に頭をつけて押しましたが、びくとも動きません。カツヤはそのまま大きな体をソランの上にかぶせてきました。上から押しつぶそうという作戦です。ソランは背中にすごい重みを感じましたが、「えいやああ」と声を出しておもいっきり腰を伸ばしました。油断していたカツヤは土俵の上に頭から転がりました。

「おおおっ」

「やった」

子供たちはいっせいに声を出し、ソランをたたえました。

「ソランの勝ち」と審判が告げました。

起き上がったカツヤもソランをほめました。

「やられたな。お前は腰が強いな。練習すればもっと強くなるぞ。今度の大会の子供相撲に出てみないか」

マサトもソランの肩を抱いて言いました。

「そうだよ。俺と一緒に出ようぜ。今年はタロウとトシと、それにカツヤが出れば、子供相撲で優勝できるかもしれないぜ」

ソランは喜んでうなずきました。

《この村はいいやつばかりだな》

「ソラン、夕食よ」

母のトモが呼んでいます。あたりはすっかり暗くなっていましたが、子供たちは何も気にしないで遊んでいたのです。子供たちは暗闇でも見える不思議な目を持っているのでしょうか。

「じゃあな」

ソランは少年たちに手を振ると家に戻りました。家の中は暖かくなっています。囲炉裏に勢いよく火が燃えています。トモは薪（たきぎ）をわきへ寄せて火を小さくしました。土鍋（どなべ）の中には魚汁が煮えています。ヒエやキビがすりつぶされて一緒に煮込まれているのでとろりとした汁になっています。

おばあさんのユーカとおじいさんのジロウがうれしそうに笑顔を浮かべてトモとソランを見つめていました。おじいさんはもうお酒を飲んでいます。とても背が高いので、セイタカというあだ名でいつも呼ばれている、話好きなおじいさんです。トモが作ったイカの塩辛をおいしそうに口に運んでいます。「ほーい」が口ぐせです。

「ほーい、トモとソランはすっかりうちの子供と孫のようになったな。トモの作る料理はおいしくてたまらんよ。お前たちさえよければ、いつまでもここにいても良いのじゃがな」

おばあさんのユーカもうれしそうに言います。

「そうだよ。お前たちの帰る村はずっと遠いところにあるんだらう？ 無事に帰れるかどうかも分からないし、無理をして行くことはないよ。トモは美しいから妻にしたがる男もたくさんいるさあ」

ソランは母の顔を見つめます。この村を気に入っているのです。ここで暮らしてもいいのにな、と思いました。でも母は笑いながら言いました。

「お二人の親切、ありがとうございます。この村は本当に良いところですね。でも、帰らなくてはならないのです。故郷（ふるさと）の村でわたしを待っている人たちがいるのです」

セイタカおじいさんが何かを思いついたように言いました。

「ほーい、そういえば、トモの故郷は西の高い山を越えたところにある、サク村というんじゃない？」

「はい、そうです」

「最近、西や北の山のほうから、暖かい海辺の土地を求めて移動してくる人が多いんじやが、三年前に移ってきた人らの村が、二日ほど歩いたところにあるそうじゃ。やはり西の山の向こうからきたらしい。この人らにトモの村に行く道のことを聞いてみるといいかもしれないな。村長（むらおさ）はまだ若いのじやが、なかなかの人物らしいぞ」

トモは目を輝かして答えた。

「そうしてみます。春になったらすぐに行ってみます。そういえば私の故郷の村でも、村長（むらおさ）の父が海辺の広い土地へ移ることを考えていました。もう七年以上前のことですけど。もうどこかに移動していたらどうしよう。でも見つけるまであきらめないわ」

母の決意が固いことは分かっていましたが、ソランは本心をもらします。

「お母さん。どうしても見つからなかったら、この村で暮らせばいいよ。友達もできたし、ボクはそれでもいいよ」

トモは笑いながら言いました。

「そうね。ソランはこの村が気に入ったのね。この村の皆さんのおかげで本当に助かったわ。もし、どうしても見つからないなら、このフジミ村の仲間に入れてもらいましょうね」

「うん」

ソランはほっとしました。本当は、長い旅をして母の村を探ることが不安だったのです。

☆

「じゃあ、今日のお話はここまで。空歩（そらん）、もう寝ましょうね」
母の智子（ともこ）は息子に言いました。

「ネエ、ママ。トモはさあ、美人なの？」
空歩はにやにやしながら尋ねました。

「そうよ。すごい美人。ママと同じくらいかな」
そう言うと智子ママは「あはははは」と元気よく笑いました。

ソランは口には出しませんでしたが、『ママはほんとに美人だよ。と思いました。友達の正人（まさと）と勝也（かつや）にもいつも自慢しているのです。』

3 相撲（すもう）大会

3 相撲大会

冬の一番寒い月が、一年が始まる新年と決められていました。月が夜空からすっかり消えてしまう日が新年の始まる日となります。この日からまた月がふくらみ始めます。太陽が照らす明るい時間がとても短くなっていたのですが、これから夏に向かって少しずつ長くなっていくのです。

フジミ村の人々は遠くに見えるフジ山に向かって手を合わせて祈ります。毎日の安全や一年の畑の収穫（しゅうかく）の豊作や海の魚の大漁（たいりょう）をフジ山にお願いするのです。

ソランはお母さんのトモがフジ山に向かって祈る姿を見たことはありません。ソランの故郷の村の人々もフジ山を拝んでいたのですが、トモは決してそうしませんでした。ほかの人と同じようにしないことをあまり良く思わない人たちもいたのですが、トモの決意は変わりませんでした。

「私が祈る神様はね。故郷の山の村で兄さんが教えてくれた神様だけなのよ。その神様はね、天と地を作った神様なので、目で見ることにはできないの。石や木や土でできた、見える物に頼ってはいけないと神様は教えているのだから、いつも兄さんは言ってたわ。だから私も祈るときは目を閉じて頭の中に神様を思い浮かべるの。そうすると頭の中にきれいな虹色（にじいろ）の静かな光が浮かぶの。そうして、ありがとうを言ったり、お願いをしたりするのよ」

母の言葉の意味はよくわからなかったのですが、ソランは母の信じている神様について、ときどき考えるようになりました。いつか僕も「虹色の光の神様」に会うことができるのだろうか、と思ったのです。

新年が始まって十四日目に相撲大会が開かれました。近くにある四つの村の人々が大勢集まってきました。今年はフジミ村が大会の場所に決まっていたからです。

村の広場にはあちこちに焚火がたかれ、たくさんの人でいっぱいになりました。みんな上機嫌（じょうきげん）で笑ったり歌ったりしています。お酒を飲んで赤い顔をしている男の人たちは大声をだして騒いでいます。上半身を裸にして愉快（ゆかい）に踊っているおじさんたちもいます。

広場の中央に作られた丸い土俵の上には高い草屋根がつけられています。雨や雪が降っても土俵が壊れないようにしてあるのです。

相撲に参加する人たちは真剣そのものです。白い息を吐きながら体を動かして準備をしています

。相撲用のしっかりとした褌を腰に巻いていますが、上半身は裸です。

始めに赤ちゃんたちが、泣き相撲をします。大人に抱かれた二人の赤ちゃんが勝負します。最初に大きな声で泣いたほうが勝ちという決まりになっています。知らない人に抱かれた赤ちゃんはたいていすぐに泣きだしてしまい、大人たちは大笑いをして見えています。いつまでたっても泣かない子や、それどころか大声で笑いだす赤ちゃんもいて、やっぱり大人たちに笑われます。

次に、九歳以下の子供たちの対抗試合が行われます。その次に十歳から十五歳までの若者相撲が行われ、最後は大人相撲です。

ソランは子供相撲に出るのですが、とても緊張（きんちょう）していました。できれば逃げ出したいくらいでした。でも、勇敢（ゆうかん）だった父を思い起こしました。父は故郷の村の相撲大会では何度も優勝したことがある勇者（ゆうしゃ）だったのでした。ソランは父と相撲をし、何度も何度も投げ飛ばされながら育ってきたのでした。いつか父を負かすことが目標（もくひょう）でしたが、父がない今、それはかなわない夢になってしまいました。父のためにも弱虫になってはいけないと心に決めました。

ソランたちのフジミ村と初めに戦うことになったのはサヤマ村でした。少し山のほうに行ったところにある村です。体の大きな子ばかりを五人集めていました。

細いけれど筋肉がついた体のマサトがソランにつぶやきます。

「体が大きいだけじゃだめさ。腰が据（す）わってないとね」

一番勝負は、そのマサトが、相手の一番大きな子供と戦うことになりました。ひとつ上の組の若者相撲に出てもおかしくないほどの体格をしています。

マサトは「よーい、はじめ」の声とともに素早く相手の胸を押します。相手は土俵の端まで押されましたが、何とか踏みとどまってマサトの腰の褌をつかもうと身を乗り出してきました。その瞬間に体をかわしたマサトは、今度は相手の背中を思いきり押しました。相手はたまたま「あっ」と言って土俵に手をついてしまいました。マサトの勝ちです。フジミ村の人々は喜びの声をあげました。

二番勝負はトシの出番です。トシは体が小さいのですが、いつも素早く動いて相手を土俵の外に押し出してしまいます。今回も「はじめ」の合図とともに右へ左へと動き回りました。あっという間に相手の後ろ側に回ってしまい、背中を押して押し出しました。トシの勝ちです。

三番勝負はタロウの番です。体はあまり大きくありませんが、鋭い投げ技を持っています。「よ

「い、はじめ」の合図の後に、タロウは少し後ろに下がりました。そして相手がつかみかかろうとしてくると右に回り込むようにして逃げます。それを繰り返すと、相手はイライラして無理にとびかかろうとします。それがタロウの計算です。素早く体をかわして相手を投げ飛ばします。今回も相手はタロウの伸ばした右足につまずくようにして倒れてしまいました。

さて、四番勝負がソランの出番です。相手はやはり体の大きな、たぶん九歳の子供です。ソランは自分の胸の鼓動の音がはっきりと聞こえました。緊張してのどが渇いています。

「よーい、はじめ」

ソランは合図の声が聞こえると緊張がすっとおさまるのを感じました。『勝っても負けても精一杯（せいいっぱい）やればそれでよい』という父の言葉を思い出したのです。ソランは腰を低く構（かま）えて相手がかかってくるのを待ちました。腰を伸ばしていると体が安定しないので、すぐに倒されてしまったり、押し出されてしまうことを知っているからです。すると今回は相手も腰を落としてじっと待ち構えています。おだやかな顔をしていました。

「強いな」とソランは感じました。二人は「えいっ」と胸と胸でぶつかり合った後、お互いに相手の腰の帯をつかみました。いわゆる、がっぷり四つです。見守る人々の応援の声がひととき大きくなります。

「がんばれ」

「小さいのがんばれ」

大きな相手に引けを取らないで、しっかりと組んだソランに声援（せいえん）がかかります。相手は右へ左へと揺さぶってきますが、ソランはぐっところえました。相手が体ごと押してきて土俵際（どひょうぎわ）に追い詰められた時、思い切って相手を投げ飛ばそうとしました。ほとんど同時に二人は土俵の外に転がり落ちました。どっちが勝ったのか判断が難しいところです。審判は少し考えてから、相手の勝利を告げました。

「ええー」

フジミ村の人々からの抗議（こうぎ）の声が上がりました。マサトたちも声を上げています。

ソランは立ち上がると土俵に上がって言いました。

「僕の負けです。先に手をついてしまったと思います」

すると応援（おうえん）していた母親のトモがとつぜん、大きな声をだして叫（さけ）びました。

「ソラーン、よくやったわよ。かっこいいー」

あんまり大きな声だったのでみんなびっくりしてトモを見ました。トモは手をぐるぐると振り回していました。みんな大声で笑い出しました。

「いさぎ良いぞ、ちいさいの」
人々からもソランをほめる声が上がりました。

最後の五番勝負はカツヤの出番です。はじめの合図が終わると同時にカツヤは相手を土俵の外に投げ飛ばしてしまいました。フジミ村はサヤマ村に四対一で勝ちました。

続いて行われたのは近くの海沿いにあるシキ村と、南のほうにある大きなトコサワ村の子供たちです。去年の子供相撲ではトコサワ村が優勝していました。シキ村の子供たちも頑張ったのですが、三対二でトコサワ村が勝ちました。

そしていよいよ子供相撲の決勝戦、フジミ村とトコサワ村の勝負が始まりました。結果はこの通りです

- 一番勝負 マサト（フジミ村）の勝ち
- 二番勝負 コウヘイ（トコサワ村）の勝ち
- 三番勝負 ヒロ（トコサワ村）の勝ち
- 四番勝負 ソラン（フジミ村）の勝ち
- 五番勝負 カツヤ（フジミ村）の勝ち

そうです。三対二で今年はフジミ村の子供たちが優勝しました。ソランは大活躍でした。フジミ村の人たちの応援もすごかったのです。何しろソランがもし負けたらトコサワ村の勝ちになってしまったのですから。

決勝戦でもソランは相手の力に押されて土俵際まで追い詰められたのですが、今度はみごとに相手をうっちゃって土俵の下に投げ飛ばすことができました。それからしばらくの間、ソランは「うっちゃり」というあだ名で呼ばれることになるのです。

相撲大会の後にみんなで飲んだり食べたり、歌ったり踊ったりしました。ほかの村からきた人々は暗くなるころにはそれぞれの村へと帰って行きました。満月が足元を明るく照らしていました。

「きょうのお話はここまで。ソランはがんばったわね」お母さんの智子はいつものように掛布団を直すと、布団の上からポンポンとソランの胸をたたきました。きょうも安心して眠れそうです。

『「うっちゃり」って変なあだ名だな。でもソランは正直だな』

空歩は自分も正直になろうと思いました。そしてすぐに、あたたかな布団に猫のタマみたいに顔をうずめて眠りました。

4 ヤーハの神

4 ヤーハの神

「ヤーホー」

母のトモが大きな声で叫（さけ）びました。

「ヤーホー」

すぐに同じ言葉が、空に響（ひび）きました。

山びこです。

ソランも真似（まね）をします。

「ヤーホー」

山びこが答えます。

「ヤーホー」

トモとソランはフジミ村の近くの低い山に登っていました。食べられる木の芽や草を探すためです。

「まだ寒いけど、少し気の早い木や草たちがもう春の芽を出しているころよ。ほら、これがワラビよ」

トモは先がくるくるとまるまっている緑の草をソランに見せました。

「あっ、ぬるぬるするやつだね」

とソランはすぐにわかりました。

故郷の村にいたときにも母が春になるとよく取ってきては家族で食べていたからでした。

でも、山の斜面に生えているところを見るのは初めてでした。

「わあ、あっちにもあるよ。こっちにも」

ソランはうれしくなって地面からすくと伸びているワラビを夢中でつまみました。折るときにポキッと小さく音がします。

「ソラン、根元から取ってはだめよ。来年の分がなくなってしまうわ。」

「はい」

雪解け水の流れる小さな川に沿ってフキノトウがたくさん芽を出していました。茶色い地面から顔を出している明るい草色の若い芽をつみとります。味噌で味をつけて食べるのですが、少し苦いので大人の味です。ソランはあまり好きではありません。

小川の近くを探し回っていたトモが嬉しそうに声を出しました。

「見つけた！ 山ワサビよ。これはセイタカおじいさんの好物なのよ。醤油（しょうゆ）で味をつけるととてもおいしいの。おじいさん喜ぶわ」

「知ってる。でもこれ、すごく辛（から）いよね。大人は何で辛い（にが）のや辛いのが好きなんだろう」トモが土から掘り出した、白くて太い根っこの山ワサビを見てソランは首をひねりました。

母のトモは笑顔で答えました。

「ほんと、なぜかしらね。きっとユーカおばあさんなら理由を教えてくれるわ。後で聞いてみましょう」

ユーカおばあさんは家のすぐ裏に、野菜の畑を作っていました。森の中から取ってきた食べられる草や木を植えて育てているのです。

山から帰ってきたソランとトモは、取ってきたワラビを土の鍋で煮ながらユーカおばあさんとおしゃべりしました。

「ははは、野菜畑というより花畑だのう。わたしはきれいな花が大好きだから、あちこちで見つけた花の咲く草をみんなここに植えておくのさあ。春になるとみんないっせいに咲きだしてそれはそれはきれいだよ。村中の者が見に来るのさあ。ほれ、そこらにむしろを敷いてのう。お花見をするのさあ。蝶（ちょう）も飛んでにぎやかになるよ。男衆（おとこしゅう）は酒を飲んでばかりだのう」

ユーカおばあさんは少し声を小さくしてソランにだけ内緒話をしてくれました。

「ソランにだけ話すことだけだものう。お花見の時はコボシ様たちも遊びにくるのさあ」

「コボシ様？」

「そうさあ。これくらいの背丈（せたけ）しかない、小さなお人（ひと）たちさあ」

ユーカおばあさんは自分の小指を立てて言いました。

「コボシ様はのう。心のきれいな人にしか姿をあらわしてはくれないのさ。この村の衆（しゅう）は何人も見ておるがのう。ソランとトモもきっと見ることができるだろうよ」

セイタカおじいさんの吹く口笛が聞こえてきました。おじいさんはいつでも口笛を吹くか歌を歌

っているかしているのです。

「ほーい、ほい。帰ったぞ」

囲炉裏のそばで丸くなって寝ていたタマが「なーお」と鳴いておじいさんの足元に体をすりよせました。

「ほーい、タマ。おみやげじゃぞ」

おじいさんは、マタタビの木の枝をタマにあげました。タマは急にのどをゴロゴロとならし始めました。

「ほーい、タマの好物じゃな」

「子猫のころはそうでもなかったが、年を取るとマタタビの味がわかるようになるのかのう」とおばあさんが言いました。

ソランは山の中でのトモとの会話を思い出して、ユーカおばあさんに聞きます。

「そうだ。おばあさん、どうして大人になると苦（にが）いものや辛（から）い物が好きになるの？」

「それはのう、神様からの罰（ばつ）なんだよ」

「えっ、神様の罰なの？」

ユーカおばあさんはこんなお話をしてくれました。

「わたしら人間はのう、初めはみんな良い人だったのだが、ある時、神様に反抗して悪いことをしてしまったのさあ。神様は罰として、悪いことをする人には、そのたびに苦いものや辛いものをおいしいと感じるようにしたのさあ。だから嘘をついたり、人に意地悪をしたり、動物をいじめたり、ごみを散らかしたりするたびに、だんだん辛い物や苦いものが平気になってしまうのさあ。みんな大人になるまでには、なにかしら悪いことをしてしまうので、そのうちに苦くて辛い物が好きになってしまうのだな。うんといっぱい悪いことをする人は、良い人なら舌がしびれてしまうような辛いものも、口が曲がるほどの苦いものも、平気で食べられるようになってしまうのだろうて」

話を聞いていたセイタカおじいさんがつぶやきました。

「わしもいっぱい悪いことをしてきたのかな。今じゃ、苦いものが大好きじゃよ。まあ、大人になるってことはいいことばかりではないことは確かじゃよ」

おじいさんはそういうとトモが山から取ってきたフキノトウの味噌（みそ）あえをおいしそうに口に運びました。

「ほーい、苦いぞ。けれど、おいしいぞ」

マタタビをかじって酔っぱらってしまったタマは、のどを鳴らして、おじいさんのあぐらをかいた足に体をすりつけていました。

次の朝は太陽がまぶしいくらいに森や海を照らしていました。友だちのマサトがソランをむかえにきました。丸木で作った舟に乗って沖にあるウラワ島に行くのです。マサトの父親は腕の良い漁師（りょうし）でした。天気の良い日には毎日のように海に出て魚をとります。ウラワ島の近くの海には魚を取るための網を仕掛けてあるのです。今日はソランと一緒に連れて行ってくれるのです。もう一人の友だちのカツヤも一緒です。カツヤの父親も仲間の漁師なのです。

静かな海の上を二せきの丸太船が沖へとこぎ出してきます。カモメがたくさん空を飛んでいます。フジ山がきれいに見えます。マサトの父とカツヤの父は舟を上手にこぎながら楽しそうに歌を歌っています。

おーいおーいカモメさん
お空で鳴いてるお嬢（じょう）さん
わしらと結婚しておくれ
まいにちお魚 食べ放題（ほうだい）
温（ぬく）といお宿（やど）も寝（ね）放題
おまけにわしらはいい男

三人の子供たちも「いい男！」のところでは声を張り上げます。

ウラワ島につくと子供たちだけが波打ちぎわで舟から降りて島に上がりました。父親たちが仕掛けた網を見ている間に、遊ぶことを許してくれたのです。

「ヤーホー」と叫んでソランは砂浜をかけていきました。マサトとカツヤも不思議そうな顔をしました。同じように「ヤーホー」と声を上げてソランのあとに続きました。

三人ははじめにか駆（か）けっこの競走（きょうそう）をしました。一番早いのはマサトでした。二番目はソラン。三番のカツヤは体は大きいけれど駆けっこは苦手なのです。でも、相撲ではやっぱり一番強いのです。

ソランとマサトは相撲ではいい勝負になりました。ぐいぐいと押してくるマサトにソランは得意のうっちゃりで立ち向かいました。

砂浜で遊び疲れたころマサトが言いました。

「ねえ、洞窟（どうくつ）に行こうよ」

「でもそんなに時間がないよ」とカツヤが答えます。

「大丈夫だよ。きょうは少しだけだから。今度みんなで探検に来ようぜ」

「よし。わかった。ソランに教えてやろう」

ソランは「洞窟」のことは初めて聞くことでした。

その洞窟は島の森の中を少し入ったところがありました。ごつごつとした岩の下に小さな入口があります。大人が一人やっと通れるくらいの隙間から入っていくと、急に広い空間に出ました。

「おい、見ろよ」

マサトがソランの肩をたたきました。マサトの指差す洞窟の天井を見ると、そこには数えきれないほどのたくさんの黒い生き物が、天井にぶらさがっていました。コウモリです。

「うあー、いっぱいいる。襲（おそ）ってこないかな」

心配そうなソランに、カツヤが元気な声で答えます。

「昼間は眠ってるから大丈夫だよ。夕方になるといっせいに外へ飛んでいくのさ。今は大声を出しても聞こえないよ。うおー」

カツヤの大声にもコウモリは何の反応もしません。

ソランも大きな声を出してみました。

「ヤーホー」

コウモリたちはもぞもぞ動いてはいますが、少しも驚かないようです。

「ソランはさ。さっきも砂浜でヤーホーって何回も言ってたけどさ。どうして？」
マサトが聞きました。

「えっ、どうしてって、みんなそう言うんじゃないの？」

「俺たちは言わないよ」とカツヤも知りたがっています。

「へえ、そうなんだ。みんなが言うんじゃないんだ。ぼくは小さなころからお母さんがヤーホーって言うてるから自然に覚えたんだ。神様を呼ぶときの言葉なんだって。神様の名前はヤーハなんだって」

「へえ、ヤーハの神様か」

「どんな神様なんだろうな」

マサトとカツヤは不思議そうな顔です。でもすぐに大声を出しました。

「ヤッホー」とマサト。

「違うよ。ヤーホーだろ」とカツヤ。

「どっちでもいいよ。ヤッホー」

マサトはすっかりこの言葉が気に入ってしまったようです。村に帰ってからも何度も使ったので、みんなが覚えてしまったほどでした。

☆

「今日のお話はここまで。眠くなったでしょ」

お母さんの智子（とも）は息子の空歩（そら）にほほえみました。えくぼが、きゅっとできました。

空歩は大きなあくびをしながらたずねます。

「昔の人たちはみんな神様を信じていたのかな」

「そうね。きっとみんな神様を信じていたのでしょうね」

「でも今は神様を信じていない人もいますでしょ？」

「そうね、今は神様を信じていない人のほうが多いのよ。なぜかしらね。私たちのまわりには神様が起こす奇跡（きせき）がいっぱいあるのに、なぜだか見えなくなっているのね。わたしは空歩が生まれてきたときに一番強く神様のことを感じたわ。空歩は神様からのプレゼントなのよ」

空歩は、母の智子の「空歩は神様からのプレゼント」という言葉を聞いたたびにとてもうれしくなるのでした。「母さんは僕のことを好きなんだ」と感じるからです。今夜もぐっすり眠れそうです。もう一つ大きなあくびをすると空歩は目を閉じました。そして夢の中で自分によく似た猫を見ました。神様の大きな膝（ひざ）に乗ってのどをごろごろならしているのです。

5 タテシナ山

5 タテシナ山

冬の次には必（かなら）ず春が来るって不思議ですね。でも、必ずやってくるんです。雪がとけて黒い木の枝からぽたぽたと滴（しずく）になって落ちてくる春が。待ち構（かま）えていたように色とりどりの花が咲き、蝶々（ちょうちょう）が、風にとばされる花びらのように舞う春が。

寒い冬の日にも時々、春がやってきて、うきうきとした気分させてくれるけど、すぐに冬の冷たい風に乱暴（らんぼう）に追いはられてしまいます。でも本当の春は違います。こんどは暖かい春風が冷たい冬風を北国の冷蔵庫にとじ込めてしまうのです。

ソランとトモの住むフジミ村にも春がやってきました。

「ジミー、取ってこい」

ソランの投げた木の枝を追って、小さな茶色い子犬が嬉しそうに走っていきます。枝が少し太すぎたので子犬は口にくわえることができません。やっと木の端の細いところを加えて引きずりながら枝を持ってきました。

「よし、ジミー。えらいぞ」

ソランは子犬の体中をなでてあげました。

ジミーは、セイタカおじいさんの飼っている犬がひと月前に産んだ子犬です。フジミ村の名前から考えて、ソランがジミーと名付けました。

三匹の子犬のなかから、ソランが自分で選んだのです。ほかの二匹ほど元気がなくて引っ込み思案（じあん）なところが気に入ったのでした。

ところがどっこい、ジミーはモリモリと餌を食べるとすぐに誰よりも元気になりました。

母のトモは春になるとそわそわし始めました。故郷の山の村に早く帰りたい気持ちを抑えることができません。

「まだ春のドカ雪が降るかもしれないし、あとひと月くらいはここにおったらどうかね」しきりに勧めるユーカおばあさんの言葉も、トモの気持ちを動かすことができません。

「大丈夫です。この季節になれば森ではいくら食べ物が見つかるし、凍えるほど寒くはならな

いでしょうし」

「あれあれ、何を言っても、帰る、かえるの一点張りだのう」

ユーカおばあさんは、トモとソランにいつまでも一緒にいてほしいのでした。もう自分の子供と孫のように思っているのです。

「おばあさん、ご恩（おん）は一生わすれません。また、必ず会いに来ます」

トモも心の中でユーカおばあさんを本当の母親のように思っていました。毎日毎日たくさんのご話を話し合いました。ほんとに楽しい月日だったのです。ソランもユーカおばあさんが大好きでした。ソランと同じ年の友達のように、ふざけたり笑ったりしました。

旅立ちの朝はよく晴れて暖かでした。フジミ村のまわりの木々は薄緑（うすみどり）の葉のつぼみをつけています。少しかすんでいましたが、フジ山も遠くにはっきりと見えています。村の人たちがほとんど見送りに出てくれました。

「ソラン。今度会うときにはまた相撲で勝負をしようぜ。まけないぜ」と、カツヤがソランの手をにぎって言いました。

「故郷の村が見つかったら何とかして連絡しろよな。俺たちがたずねていくからさ。お前とは一生の友達だからな。いつかお前が村長（むらおさ）になって、俺も村長になって、二つの村で夏の祭りをしようぜ。でっかい火をたいてみんなで踊るんだ。こんなふうにな」と言うと、マサトは拳（こぶし）をにぎった二つの腕を上げたり下げたりして踊りだしました。「熊の子踊り」です。すぐに子供たちが真似をして踊りだしました。村人たちはみんな大笑いをしました。

「ははは、それじゃ『猿（さる）の子』だ」

「お前は『蛇（へび）の子』だ。くねくねし過ぎだぞ」

「おいおい、『山鳩（やまばと）』かっ」

みんなおもいおもいに動物をまねて踊り出すのでした。

やがてセイタカジロウおじいさんが大きな声で言いました。

「みんな、いつまで踊るとるのか。日が暮れてしまうぞ。トモ、ソラン。お前たちはこの村の衆だ。いつでも帰ってこい。トモを嫁（よめ）にもらいたい男衆もたくさんいるでな」

「そうだ、そうだ」と村の男たちが叫ぶと、

「あんたは私がいるでしょ」と、何人かは妻たちにお尻をはたかれています。

にぎやかな見送りに、泣いたり笑ったりしながら、トモとソランはフジミ村を後にしました。子犬のジミーも後をついて歩いています。でもまだすぐに疲れてしまうので、ソランは肩にぶら下げた、草で編（あ）んだ袋にジミーを入れてあげました。

「ソラン、見えた？」と、歩きながら母がたずねます。

「うん。ユーカおばあさんの肩の上で手を振っていたね、女のコボシ様」

「そうね。それにセイタカおじいさんの頭の上でも元気そうな若い男のコボシ様が手を振っていたわよ」

「うん、僕も見ただよ」

トモとソランは顔を見合わせ、つないでいた手を大きく降って元気よく歩きました。

始めの日は海ぞいを北に向かって歩きました。二日ほど歩いたところに新しい海辺の村があって、きっとトモの故郷の村への道を教えてくれると思ったからです。

夕方になって海辺の岩の影に火をたいて眠ることにしました。ユーカおばあさんが持たせてくれた食べ物がいろいろあったので夕飯にそれを食べることにしました。ソランの好物の干し芋（いも）と干し柿がたくさんありました。

西の空がみかん色に夕焼けを始めました。海風が暖かく吹いています。たき火をしなくても寒くないくらいです。

「あらっ」と母のトモが声をあげました。その眼は西の空に釘付けになっています。

ソランもその方角に目をやりましたが、紫色に見える山々と、赤く染まり始めた雲のほかには何も見えません。

「タテシナ山だわ」

トモはそういうと海辺を走り出しました。ソランはわけがわかりませんでした。母の後を追って走りました。トモは夢中で走ると、少し先にある大きな岩に上りました。

「きっとタテシナ山だわ」

それは母の故郷の村からよく見える山の形とよく似た山の頂だったのです。

夕暮れの光に照らされた紫色の山々の頂きの、もっとずっと遠くにあるその山は、深い青色に見えました。フジミ村からは見えなかった山の頂が見えるところに、二人は偶然に来ていたので

した。

その山は二人のいるところからちょうど真西（まにし）にあります。もし、この山が本当に母の村の近くの山ならば、二人は真西へ向かって歩けばよいのです。母の顔には固い決意が浮かびました。ソランは黙って母を見つめました。

海風がトモの髪の毛を揺らしています。岩の下では子犬のジミーが二人を見上げて、くんくんと鳴いています。波の音がいつまでも続いていました。

夜の間気温が下がって、次の朝は肌寒くなりました。空はくもっています。

「ソラン、きのう話した通り、これからすぐに西の方角へと向かうけどいいわね。山を越えなければならぬから大変だけど、がんばりましょうね」

「うん。大丈夫さ。僕は去年よりずっと強くなったよ。背も伸びたし。母さんの足でまといにはならぬよ」

「まあ、頼もしいわね。男衆（おとこしゅう）と一緒に安心だわ。クマにあっても大丈夫ね」

「ええっ、クマは恐いな。でもタヌキぐらいなら大丈夫さ」

「イノシシは？」

「小さいのなら大丈夫だよ」

「頼りにしてるからのう」

トモはユーカおばあさんの真似（まね）をしました。

「はははは」

二人は笑いましたが、ユーカおばあさんに会えないことを思い出して、なんだかさみしくなっていました。

二人はまっすぐに西へと歩きはじめます。なるべく川にそって歩きますが、時には道のない森の中を歩かなくてはなりません。一日中歩いても森をぬけだすことはできませんでした。

夕方になって大きな木の根元に空洞があるところを見つけました。今夜はここで眠ることにしました。夕食は途中で取ってきたタケノコとキノコです。たき火でよく焼いて食べました。タケノコの甘くておいしいこと、ソランはおなか一杯食べました。気温がますます下がって寒くなったので、夜の間もたき火を消さないようにソランはまきをくべました。

次の朝、いつもとちがう不思議な感じがしてソランは目をさました。春のドカ雪が、まっ白につもっていました。名前の通りドカッと降ってソランの膝（ひざ）くらいまでつもっています。母のトモは少し早く起きてあたりを見に行ったようです。深い足跡が森の中へと続いています。

した。

もうほとんど雪はやんでいますが、くもり空で気温が下がったままなので、また降るかもしれません。ソランは木の根元にあいた小さな穴から顔を出してまわりを見わたしました。

《穴から顔を出してるキツネの子みたいだ》

子犬のジミーもやってきました。ソランはジミーを両手で持ち上げて一緒に穴から顔を出しました。

「ジミーと僕はキツネの兄弟だね」

母のトモが白い息を吐きながら帰ってきました。

「寒いわね」

ソランはすぐにたき火に薪をくべました。

「どこに行ってたの」

「見はらしのよさそうな山があったから登ってきたのよ。モノミ山って名付けたわ。この雪ではしばらく山の中を歩くのはあぶないから、どこかに村がないかどうか調べたの。やっぱりユーカおばあさんの言うとおりに、もう少しフジミ村にいればよかったかもしれないわね」

「近くに村はあったの？」

「ええ、少し戻らなくてはならないけど、モノミ山の向こうに小さな村があったわ。家がいくつか海に近いところに建っていた。煙がのぼっているからきっと誰かが住んでいるわ」

☆

「この小さな村で、びっくりすることが起きるんだけど、それは明日のお楽しみ」
母の智子は目をくるっとまわしました。

「ソランとトモがコボシ様を見れて良かったね。心がきれいな人じゃないと見れないでしょ？」と息子の空歩がうれしそうに言います。

「そうよ。友だちをいじめたり、平気ですそをついたり、何でも自分の物にしたがる欲張りな人は見れないのよ」

「コボシ様って本当にいるの？」

「神様が作ったとしたら、小さな人たちも本当にいるでしょうね。わたしも良くはわからないわ。残念ながらまだ見たことはないの」

「ふーん。ぼくにも見れたらいいな」

「そうね。一緒に探しましょうね」

また雪がふってきそうな、くもり空の朝でした。トモとソランは寒くないようにきっちりと支度（したく）をして木の洞穴（ほらあな）から出てきました。足には雪の上を歩きやすいようにカンジキをつけています。きのう、母のトモが作ったものです。木の枝を丸く輪のようまげて作ります。ソランはカンジキをつけるのは初めてでした。雪の上を歩くことが楽しくなりました。細い木の蔓（つる）と草のわらでしっかりとわら靴をはいた足にくくりつけます。

体にもむしろを巻きました。頭にはわらの笠（かさ）をかぶります。眠るためのむしろと食べ物などの荷物を持つとソランは体が少し重くなったように感じました。母のトモの荷物はもっとずっと多いのですが、フジミ村のセイタカおじいさんからもらった背負子（しよいこ）に、上手にのせて背中に背おって歩きます。子犬のジミーは雪の上を歩くことができません。ソランが肩からぶら下げている草のカゴの中でおとなしくしています。

さあ、出発です。二人はモノミ山をこえていくことにしました。一番近い道だったからです。でも、ちゃんとした道があるわけではありません。二人が通るところに足跡（あしあと）がついて道ができるということでした。

モノミ山の頂上に着くと、ひと休みです。きのうからの雪でどこもかしこも、まっ白な眺めでしたが、遠くまで見ることができました。東がわには灰色の海の向こうに大きな島や小さな島が見えました。海辺にある小さな村も見えます。海のずっと遠くに双子（ふたご）のようにならんでいる高い山が見えました。フジミ村の方角には森の木々がたくさん見えましたが、村は見えません。フジ山もくもって見えていません。

西の方角にはトモの生まれ育ったサク村があるはずですが、近くの山や遠くの山に隠れて、見ることはできません。まだまだ何日も何日も歩かなくてはたどりつくことができない遠いところにあるのです。

「ソラン、見てごらん」

トモが雪の斜面を指さしました。茶色い動物が動いています。よく見ると二匹の野ウサギです。一匹が、もう一匹を追いかけて跳（は）ね回っています。

「きっと恋人どうしね」とトモが楽しそうに言いました。

「恋人ってなあに？」とソランはたずねます。

「そうねえ、もうすぐ結婚する仲良しの二人のことね」

「ふーん、結婚するんだ。結婚したら子供が生まれるんでしょ」

「そうよ。ウサギさんたちはきっとたくさんの子供を産むわね。百匹は産むかもしれないわ」

「ええっ、百匹も?! お母さんとお父さんの子供はぼく一人だね。お父さんはもう死んでしまったけど。お父さんとお母さんも結婚する前は恋人どうしだったんだね」

トモは片方の頬にだけ、えくぼを見せて答えた。

「そうよ。でも知り合ってからすぐに結婚したから、結婚した後に恋人になったようなものかな。ソランが生まれてくれてお父さんもわたしも本当に幸せだったわ。お父さんはとてもやさしい人だった。ソランとよく似（に）ているわ。小さいときはソランと同じように虫も殺すことができなかったんだって」

「そうなんだ。でもお父さんは勇士（ゆうし）だったよね。相撲も強かったし。僕も大きくなったら勇士になれるかな？」

「もちろんよ。ソランは誰にも負けない、やさしくて強い勇士になれるわよ。わたしを守ってね」

「うん」

ソランの胸は大きく膨らみました。

《やさしくて強い勇士。うん、ぼくはきつとなるぞ》

モノミ山を下って海ぞいの小さな村を目指します。カンジキは積もった柔らかな雪の上を歩くのにとっても役立ちます。足が雪の中に埋（うず）まらないようにしてくれるのです。でも木の多い山の斜面を下ることは楽ではありません。細い木の枝がピシッと顔にあたってとても痛いこともありますし、一步一步ゆっくり歩かないと雪の下のとがった石や木の根っこにつまづいて転（ころ）んでしまいます。

でも息を弾（はず）ませながら歩いている母と子を楽しませてくれるものもありました。それはいろいろな種類の鳥たちです。

雪をかぶった低い木に赤い実がたくさんなっていました。緑色をした小鳥が四羽、チュイチュイと鳴きながら忙しく実を食べています。目のまわりが白い色をしていました。

「メジロよ」とトモがソランに教えてくれました。

「鳴いたり食べたりいそがしそうだね」とソランは四羽のメジロを珍（めずら）しそうに眺（なが）めました。そのうちに一匹、また一匹とどこかへ飛んで行ってしまいました。

「家に帰るのかな」

「そうね。お母さんが心配して待っているのよ」

「メジロのおうちはどこにあるの？」

「木の上にお椀（わん）のような形の巣があるのよ。わたしが子供のころにも村のまわりによくさん巣があったのよ。お父さんがメジロをつかまえてカゴで飼っていたわ。とってもいい声で鳴くメジロは、みんなが借りに来るのよ。おとりにしてほかのメジロをつかまえるためにね」

「ふーん。メジロをつかまえて食べちゃうの？」

「だいじょうぶ。食べたりなんかしなかったわ。鳴き声の競争（きょうそう）をするためよ。毎年、鳴き声の『大将（たいしょう）』を決める試合まであるのよ。わたしがつかまえた鳥が『大将』になったこともあったの」

トモはなつかしそうにほほえみました。

ソランはメジロが食べていた小さな赤い実をとって自分も食べてみました。少しだけ甘さがありましたが、とても食べられませんでした。

「子供のころ歌った歌を思い出したわ」

トモは歌いだしました。

赤い実 甘いか ホトトギス
おらにも分けて おくんなよ
かわりにキビモチ くれましょう

お山を飛んでく コウノトリ
翼（つばさ）をわけて おくんなよ
かわりに両（りょう）の手 くれましょう

子ども 四ひき メジロさん
おらにも分けて おくんなよ
かわりに娘（むすめ）を くれましょう

「えっ、かわりに娘をあげちゃうの？」とソランはびっくりしました。

「そうね。へんな歌ね。子供が悪いことをしたときに叱（しか）るための歌なのかもしれないわね。誰が初めに歌ったのかわからないのよ。昔からある歌なの」

ソランは、たいていの歌は一度聞くと覚えてしまいます。この歌もお気に入りの歌になりました。

モノミ山を下り始めてから四時間くらいたちました。カンジキを履いた足がとても冷たくなりました。雪がまた降り始めました。途中で少し休んで、干し芋と干し柿を食べましたが、またおなかがすき始めていました。でも、山の上から見えた村はすぐ近くです。雪がとけるまで何とかこの村に泊（と）まらせてもらわなくてはなりません。村人たちが良い人たちならいいのですが、少し不安です。

五けんほどの草の屋根がかたまって立っています。どの家からも暖かそうな煙が上っています。村から少し離れたところに大きな樫（かし）の木が二本ならんで立っています。冬でも緑の葉をたくさん茂らせています。どうやらこの村の入り口になっているようです。冬眠から覚（さ）めたリスが二匹、枝の上にあります。大雪に困ったような顔をしてあたりを見回しています。

トモはなつかしい気持ちになりました。故郷のサク村にも同じような樫の木が二本立っていたからです。

とつぜん、人の気配がしてトモとソランは立ち止まりました。木の切り株に小さな男の子がちょこんと座っていました。じっと座っていたので近づくまで気が付かなかったのです。ソランは一瞬（いっしゅん）、「コボシ様だ」と思ったのですが、その子は普通の大きさの人間の子供でした。じっと二人を見つめています。

「こんにちは。この村の子ですか」

トモが笑顔で話しかけます。でも、男の子は何も答えません。少し首をかしげてじっと見つめているだけです。

《耳が聞こえないのかな》とソランは思いました。故郷に村にも、ソランと仲良しになった耳の聞こえない子がいましたが、感じが似ていたのです。

「ここはなんという名前の村なの」とトモがまた話しかけました。

男の子は唾（つば）をごくっと飲み込むようにしてから口を開きました。

「サイタ村」

「えっ！」

男の子の答えを聞いたトモは、びっくりしたような顔になりました。どこかで聞いたことがある名前だったのです。何年も昔の記憶（きおく）がよみがえりました。

故郷の山の村の人たちが楽しそうに話し合っていました。

「ははは、新しい村を作たらなんという名前にするかの」

「そりゃあ、サク村からできる村だからサイタ村だんべ」

「ははは、咲く村から咲いた村か。こりゃあおもしろい。そうすんべえ」

「ははははは」

トモは目を輝かせ、口を一文字に結びました。

「もしかしたら……」

その時、森の中からもう一人の男の子が走って出てきました。

「うさぎがとれたぞ」

手に野ウサギをつかんでいます。

《あの、野うさぎでなければいいな》

ソランはすぐに、モノミ山を下り始めた時に見た二匹の『恋人ウサギ』たちを思い出したのです。

切り株に座っていた男の子が言いました。

「ダ、ダメだよ。き、きょうは、安息日（あんそくび）だよ」

「わかってるさ。かってに弓矢にあたってきたのさ、このウサギ」と元気のいい男の子が答えます。

トモは「ああっ」と言ってその場にひざまずいてしまいました。トモにははっきりと分かったのです。この村に探している人がいることが。

トモは二人の男の子に、自分たちが宿を探していることを告（つ）げます。男の子たちはすぐに走って行って一けんの家に駆け込みます。

トモとソランは手をつないで待ちました。

家から大きな男の人が、うつむきながらゆっくりと出てきます。顔にはひげが豊かに生（は）えています。トモとソランを見ると、男の人はその場に立ちつくしました。目を大きく見開いています。ソランは、その男の人の眼の色がうすい茶色であることと、鼻がとても高いことに気が付きました。

トモが呼びかけます。

「ダビド！」

男の人は今までのゆっくりとした動きを忘れたように、素早く駆け寄りました。そして、トモの

体をきつく抱きしめたのです。まるでどこかに消えてなくなることを恐れるかのように、しっかりと。

「トモ！ トモ！ トモ！」

男の人は何度もトモの名前を呼んでいました。

☆

「トモは故郷のお兄さんに会えたんだね」と空歩（そらん）はうれしそうに言いました。

「そうよ。よかったわね」母の智子（とも）もうれしそうです。

「安息日（あんそくび）って何のことなの？」

「それは明日のお楽しみ」

「まだお話は続くの？」

「まだ始まったばかりよ」

「ふーん」

その夜、空歩は夢を見ました。木の枝に作られたメジロの巣の中に、お母さんメジロと四羽の子供のメジロが身を寄せ合って眠っていました。子供のメジロの中の一羽は気持ちよさそうに眠っている空歩だったのです。

7 サイタ村

7 サイタ村

暖かな春の日ざしがドカ雪をすっかり溶（と）かしてしまいました。森の木々は新しい葉をいっせいに伸ばし始めています。若葉の緑色はなんと胸をおどらせる色なのでしょう。それは命の色です。茶色い地面から、黒い木の枝から、新緑（しんりょく）の命が顔を出すのです。

サイタ村はトモの故郷のサク村から「開拓（かいたく）村」として新しくできた村でした。まだ四家族しか住んでいません。これから新しい家をたくさん作ってサク村の人々が少しずつ移り住んでくる予定です。トモとソランはまだ人の住んでいない新しい家に一週間泊（と）まっています。きょうはまた「安息日」です。

「ソラン、出てこいよ。弓矢を教えてあげるよ」
タケルが呼んでいます。

この村に来た時に会った弓（ゆみ）好きの少年です。ソランは母の顔を見て、うなずくのを見てから元気よく家の外に飛び出しました。

青空の広がったよく晴れた日でした。何もしないでいるなんて子供たちにはとてもできません。外に出ると、暖かい風が吹いていました。

サイタ村の家はどれも新しく見えました。東側の海辺からすぐ近くの土地に、かたまって建てられています。南側が村の入り口になっていてそこに二本の樫（かし）の木が立っています。まわりの木は切りたおされて、そこがヒエやアワをまいて育てるための畑になっています。川が海に流れ込む河口も南側にあります。

村の西側にはクリの木がたくさん植えられています。その向こうは深い森になっています。炭焼きのための小屋に行くための道が作られています。

西側には小高い丘もありました。登ればきっと景色が良いでしょう。
北側は黒い砂の海岸がずっと続いています。

「今日は安息日なんでしょう？ 弓を打ってもいいの？」
ソランは遊びたくてうずうずしている様子のタケルに聞きました。
「練習だけならいいのさ...と思う。だいじょうぶだよ」とタケルはニコニコしています。

気がつくともう一人の少年が木の切り株に腰をかけています。この村に来た時に初めて出会ったあの少年です。サトシという名前です。

「本当は ダ、ダメなのさ。で、でも村長は知らないふりをしているよ」

サトシは言葉がうまく出てこないときがあります。でも本人はそれを少しも気にしていません。

「大きくなったら治るよ。それまではこの話し方を楽しむのさ」とのんびり考えています。

(お話の中ではサトシの言葉は普通に話すわね)

「新しい村長（むらおさ）のダビドが、ずっと前に『安息日』には働かないっていう掟（おきて）を提案したのさ。サク村の時からずっと守ってる。みんなはもうすっかり慣れているよ。この掟のおかげでみんなずっと幸せになったんだって。ぼくもそう思うよ。安息日にはいろいろなことを考える時間があるんだよ。食べ物のことやほかの持ち物のことを忘れてね。神様について考えたりするんだ。それに歌や踊りはいいのさ。だから楽しいよ」

サトシは安息日の決まりを喜んでいるようです。

ソランはタケルとサトシに連れられて海岸にやってきました。砂浜の上なら飛んで行った矢をすぐに見つけて拾うことができるのです。一本の矢も無駄（むだ）にはできません。

「まず砂で的を作るんだ」

タケルは砂を掘って小さな山を作りだしました。ソランとサトシも一緒に作ります。すぐに腰ぐらいの高さの砂山ができました。

「よし、これが的だよ」といってタケルは履（は）いている草鞋（ぞうり）を脱ぐと、一つを砂山の上のあたりに斜めに置きます。初めは十メートルくらい離れたところから矢を射（い）って練習するのです。

「見てて」と言うと、タケルはゆっくりと弓に矢をつがえます。しゅっと放たれた矢は草鞋の真ん中に突き刺さりしました。

「命中（めいちゅう）！」とサトシが叫びます。

「すごい！」とソランも大きな声を出します。

「まあね。でもあんまり草履をぼろぼろにしちゃうと母さんに怒られるのさ」とタケルはペロッと舌を出しました。

次に矢を射たのはサトシです。草鞋には当たりませんでした。砂山に深く突き刺さりしました。

ソランが弓矢を打つのは初めてでした。故郷の村でも、もちろん男たちは弓矢を使っていたのですが、十歳にならないと使わせてはもらえなかったのです。それに正直に言うとソランは弓矢で動物を仕留（しと）めることが好きではありませんでした。でも男の子ですから弓矢をカッコよく射ることはあこがれていました。砂山と草鞋が相手なら何の心配もなく矢を打てます。

「うわっ、思ったより力があるね」と弓を引きながらソランは言います。弓矢がなかなか安定しません。

「えいっ」と右手を離すと矢は思わぬ方向に飛んでいきました。なんと砂山を大きく外れて海の中に落ちてしまったのです。

「命中！」とサトシが大声で言いました。

「海に命中だ！」とタケルも愉快（ゆかい）そうです。

「やった！ 海を捕（と）ったぞ！」とソランも負けずに大声で言いました。三人とも大笑いです。

おなかをへらして三人の男の子たちが帰ってくると、村の家族がみんなで集まって食事の準備をしていました。安息日には料理はしないのですが、みんなはたいてい前日に作ってあったものを持ち寄ってお昼の食事をします。きょうは全員が村の広場に集まっています。トモとソランの歓迎会のためでした。

村長のダビドが歓迎の言葉をのべます。

「もう会えないと思っていた妹のトモが、かわいい男の子を連れて帰ってきてくれました。どれだけ神に感謝をしても足りないでしょう。わたしはもう天にのぼったような気持ちです。トモと一緒に兄と妹のように育った若い日々が戻ってきたように思われます」

「ダビド村長、若返ったぞ」誰かが叫びます。

「そうです。わたしは十歳は若くなった気がしています。いえ、サク村の人々に命を救われた十四年前に戻った気持ちです。雪の中でたおれていたわたしを見つけてくれたのがトモでした。トモの父である村長がわたしを実（じつ）の子供のように育ててくれました。わたしは村のために自分の命をささげようと、その時決意しましたが、今、ふたたび同じ決意の気持ちを固くしています。この新しいサイタ村を早くちゃんとした村にしたい。サク村の人々を皆呼び寄せて、安心して暮らせる『神の国』にしたいと願っています」

「頼むぞ、ダビド」

「いい男よ」

「わはははは」

人々は愉快地声をかけます。

ダビドは村の誰よりも背が高く、筋肉のついたたくましい体つきをしていました。ソランはダビドの腕が、とても太いことに気づいて目を丸くしました。その太さの理由をソランは次の日に知ることになります。

「ソラン、今日は私の手伝いをしてくれないか」
ダビドが朝早くにソランを迎えにきました。

母のトモは「行ってらっしゃい」と喜んで送り出してくれます。ソランは何もしゃべらないダビドのあとについて海岸を北に向かって歩きました。このあたりの砂浜は普通よりも黒い色をしています。

「どうしてこの砂がこんなに黒いか、わかるかい？」とダビドは聞きました。
「どうしてだろう。よくわかりません」とソランは正直に答えます。

「もっと北に行ったところで大きな川が海に流れ込んでいるんだが、その川の上流に銅や鉄という金属をふくんだ岩がたくさんあるようなんだ。その岩が雨に打たれたり、川で流されて細かくなって、銅や鉄がたくさん海に流れ込む。それがこのあたりの海岸に打ち上げられているのでこんなに黒い砂になるんだよ…。これを見てごらん」

ダビドは肩から掛けている袋の中から、両手にちょうど載（の）るくらいの大きさの岩を大事そうに取り出してから、砂浜の上でゴロゴロと転がしました。すると砂よりももっと細かな黒い粒がいっぱい岩に吸い付きました。黒い粒もくっついてつながって、まるでウニの針が岩から突き出しているように見えました。

「砂鉄（さてつ）だ。この岩はマグネ石というものなんだ。砂鉄を吸い寄せる力があるのだよ。これで砂鉄をたくさん集めて鉄を作ることができる」

「きれいだな。さわってもだいじょうぶ？」
「もちろんだ。さわってごらん」
ソランがさわると針のように伸びた砂鉄がさらさらと落ちていきました。

次にダビドとソランが向かったのは、村の北側に作られた小屋です。ほかの家よりも一回り大きく作られています。入口は通りやすいようにずっと広がっています。
ソランが初めて見る珍しい道具がいろいろ置いてありました。

ダビドは炭に火をおこすと、ファイゴと呼ばれる道具で燃えている炭に風をいきおいよく送ります

。そして鉄の塊（かたまり）を赤くなるまで熱します。熱くなった鉄はとても手で触ることはできません。ダビドは鉄で作ったハサミで鉄の塊をつかむと、カナドコという大きな鉄の塊の上へのせ、金づちでたたき始めました。鉄と鉄がぶつかり合う激しい音がします。ソランはおどろいて思わず耳をふさいでしまいました。ダビドはそんなようすのソランを横目で見ながら楽しそうに太い腕を何度もふるって金づちをたたきます。金づちのリズムに合わせて、ダビドの口から不思議な言葉の歌が流れ始めました。

エンヤー コラヤー

エンヤー コラヤー

ドッコイシヨ

ドッコイシヨ

不思議な言葉ですが、ソランはすぐに覚えてしまい、ダビドの歌に合わせて歌いだします。

エンヤー コラヤー

エンヤー コラヤー

ドッコイシヨ

ドッコイシヨ

二人の歌に合わせて、金づちが振りおろされ、ガチン、ガチンという音とともに火花が散（ち）ります。ソランは不思議な手品（てじな）でも見るかのように、鉄の塊が平らに引き延（の）ばされていくようすをじっと見つめていました。

ガチン、ガチン、ガチン。

☆

「ダビドは鍛冶屋（かじや）さんなんだね。だから腕が太いのか」と空歩が言いました。

母の智子は、お話に合わせて振（ふ）るい上げていた腕を止めて答えます。

「そうよ」

「ダビドはどこから来たの？」

「ずっと遠い国よ。いつかダビドがお話してくれるわ。きょうはこれでおしまい」

「はい。……ねえ、ダビドはさ、トモのことが好きなんでしょ？」

「わかった？」

「わかるさ。いつかトモと結婚するんでしょ？」

「どうかなあ。ふふふ、おやすみなさい」

智子は二つのえくぼを作ってほほえみ、いつものように息子の鼻の頭に軽くキスをしました。空歩はくすぐったくて、いつものように首をすくめるのでした。

サイタ村に暖かな春の日差しがさしています。森の木々は緑の葉でいっぱいになりました。村の西側に植えられた、たくさんのクリの木も新しい葉を伸ばし始めました。もうすぐ白い小さな花が細長い房（ふさ）のようになって咲くはずです。そして秋には大きなクリの実をたくさんらせて村人たちを喜ばせてくれることでしょう。

村人たちは、南側の木を切って作った畑にキビやヒエの種をまきました。種はすぐに芽を出して育っています。秋になれば細かな粒がたくさんなります。それは汁物（しるもの）やお粥（かゆ）にして食べられるのです。畑にはほかにも食べるための野菜がたくさん植えられています。

ソランは森の中に作った炭小屋に来ていました。タケルの父のハヤトの手伝いをするためです。タケルとサトシ、そしてサトシの弟のヨシミチが来ていました。ヨシミチはまだ五才です。タケルとサトシは、ソランより一つ年上の八才です。

タケルの父のハヤトは村長ダビデの若いころからの親友です。今日は子供たちに、炭を作るための木を切ったり、枝を切り取る仕事を教えています。春の森のなかほどすてきな場所はありません。日の光と草木の放つさわやかな香りに満ちています。鳥や動物や昆虫（こんちゅう）たちの生きる姿が目や耳を楽しませてくれます。

「ホーホケキョ、ケキョケキョ」
ウグイスの鳴く声が聞こえてきました。

「あははは。ソラン、へっぴり腰だぞ」
好奇心（こうきしん）にあふれた人間の子供たちの笑い声も、森の自然の一部です。

ハヤトはソランに斧（おの）の使い方を教えています。

「ダビドが作った鉄の斧は『すぐれもの』だぞ。石の斧の五倍、いや十倍は仕事が早いんじゃないかな。木を切ったり炭を作ったりすう仕事もだいぶ楽になった。あいつがこの村に来てから、いろいろ変わったよ。そもそもこの新しいサイタ村だって、あいつが長い間、良い土地を探し回って見つけたんだからな。あいつはもともとこの土地の人間じゃあないんだが、俺たちの村に住むようになってから村のために一生懸命（いっしょうけんめい）になって働いているんだよ。ソランは、ダビドのことは知っていたのかい？」

「母さんが、兄と妹のように一緒に育った人がいると言ってたけど、くわしいことは知りません

」

「そうか。そうだよな。トモは嫁に行ったんだからな」

ハヤトは何度もうなずいてから話を続けます。

「ダビドとトモは本当に仲良しだったよ。本当の兄と妹のようだった。ダビドはこの国の言葉がぜんぜん話せなかったんだが、一生懸命に覚えていたよ。村の衆（しゅう）は、始めはダビドを珍しがって見ていたが、すぐにあいつを好きになった。あいつは何ていうのかな、ひたむきなんだよ。誰にでも親切にするんだ。それに、あいつが神に祈る姿は誰もが胸を打たれる。ダビドにとって神様とは父親のようなものなんだな。時々あいつは我（われ）を忘れたようになって無言（むごん）で長い間祈るんだが、そんな時はみんなそっとしておくのさ。すぐに大きな笑顔になって「この世」に戻ってくるのを知っているからね。俺はあいつの真正直（まっしょうじき）なところが好きで友だちになったのさ。そして、あれは八年前のことだったかな。ダビドが新しい村のための土地を探す長い旅に出ている間に、サク村を訪れた三人の若者たちがいたんだよ。みんな立派（りっぱ）な馬に乗っていた。そのうちの一人がソランのお父さんさ。俺やダビドより少し若いくらいだったが、三人の若者のなかで一番立派だった。そういえばソランに顔が似ているな。なんていう名前だったかな？」

「トクです」

「そうだ、トクだった。そのトクは偶然（ぐうぜん）にトモが湖（みずうみ）で泳いでいるところを見かけたんだよ。トモの美しい姿に見惚（みほ）れてしまったらしい」

「父さんが話してくれたことがあります。初めて母さんを見たときに一目ぼれをしてしまったんだって。見たことがないような速くて美しい泳ぎ方をする人だったって」

「そうだよな。村の誰もトモにかなわなかったよ。ソランのお父さんは村長（むらおさ）だったトモの父親に結婚を頼みこんだのさ。あんまり熱心に頼むもので父親も根負（こんま）けしたらしい。トクは自分の大切な馬と、もう一頭の馬と、宝石のたくさんついた剣を、父親に差し出したのさ。故郷の海辺の村で取れる藻塩（もしお）も毎年贈（おく）ると約束していた。父親とトモはダビドが帰ってくる予定の日まで待ったが、約束の日より十日も過ぎてもダビドは戻らなかったのさ。それで、とうとう父親の許しを得て、冬が来る前に、残った一頭の馬にトモをのせて三人の若者たちは歩いて帰って行ったよ。その二日後にダビドがやっとサク村に帰ってきたのさ」

午後になって森での仕事が一段落すると、タケルの弟のヨシミチだけが父親と残り、ほかの子供たちは村に帰って、新しい家を作る仕事を手伝うことになりました。

この仕事は独身（ひとりみ）の二人の若者に責任が与えられていました。もうすぐ二十才になるモリシゲと十九才のユキオです。秋までにあと十軒の家を作らなくてはなりません。サク村から大勢が移ってくる予定だからです。

「あまり道草（みちくさ）をくうなよ」と森に残るハヤトが声をかけました。ソランとタケルとサトシは返事もしないで走り出しました。競走（きょうそう）です。走ることで三人はいい勝負でした。でもソランはなかなか一番にはなれません。途中にある大きな赤松（あかまつ）の木まで三人は夢中で走ります。ころんだり、うっかり遠回りをしてしまうと負けてしまうのです。今回、一番先に赤松の木に手をつくことができたのはサトシでした。サトシは背は小さいのですが、素早く走ることができます。少しの差でソランが二番になりました。タケルは思い切って近道をしようと道のないところを走ったことが裏目（うらめ）に出て、だいぶ遅れてしまいました。

この木の下で三人はいつも体を寄せ合って息が落ち着くのを待ちます。三人の頭のずっと上のほうではフクロウが木の穴に巣を作っています。森の野ネズミを餌にして暮らしているのです。

「この間フクロウの巣をのぞいたら卵が三つあったぜ。今頃はもうヒナが生まれてるかもしれないな」と息が収まるのを待ってタケルが言いました。

「ほんと？ 見てみたいな」とソランは興味しんしんです。

「安息日に見に来ようよ。僕はシジュウカラの巣もこの近くで見つけたよ。卵が九個もあったよ」とサトシが言います。

「よし、そうしよう。でもこのまえ、竹でいかだを作って海に浮かべる計画もしたよね。安息日は忙しいね。ちっとも休みじゃあないね」

タケルの言葉に三人は大きな声で笑いました。

サイタ村の西にある丘の上から見る夕暮れの海はすばらしい眺（なが）めです。見はらしの良い岩の上に、ソランと母のトモが腰掛けています。

この場所は二人のお気に入りでした。

「ねえ、ソラン。私とダビドでサク村に行ってこようと思うのだけど、だいじょうぶかな？ 父さんと母さんに私とソランが無事であることを早く知らせたいの」と母のトモがたずねます。

「うん、大丈夫だよ。タケルやサトシがいるから」ソランは元気に答えました。

「サク村までは大人が歩いて四日くらいかかるらしいの。ソランにはまだたいへんすぎる

でしょ？」

「そうだね。ぼくはこの村にいるよ。友だちとやりたいことがいっぱいあるんだ」

「良かった。ソランもこの村が気に入ったのね。あの雪の日にモノミ山から初めてこの村を見つけた時には、まさかここに住むことになるなんて考えてもいなかったけど…。きっと神様の導（みちび）きね」

トモはそう言うと、しばらく海や夕日をじっと眺めていました。村からは鉄をたたく音が聞こえてきます。

ソランは母と旅をしていた時の、毎日の不安な気持ちを思い出しました。

《今はなんて安心なんだろう。冬の間にお世話になったフジミ村も二日で行けるところにあるし、マサトやカツヤやユーカおばあさんにも、またきっと会える》

一週間後、母のトモとダビドはサク村へと向かいました。残った村人は四つの家族だけです。タケルの家族は父と母のほかに六才になる妹がいました。サトシの家族は父と母と五才の弟のヨシミチです。そして、二十代の若い夫婦と生まれたばかりの女の赤ちゃんがいる家族がいます。もう一家族、正確には家族ではないのですが、独身の若者二人、モリシゲとユキオが二人で暮らしています。

村の一日は、朝に海辺で貝をとることから始まります。砂浜には取りきれないほどの貝が「目」を出しているのです。岩場を少し探せば、ほかの種類の貝や海藻（かいそう）や魚をつかまえることもできます。これがおいしい朝食になるのです。山のサク村でも湖に貝や魚がいましたが、この海辺ほど豊かにとることはできなかったのです。

太陽が高く上るまでの間は、女たちはたいてい畑の作業をします。男たちは木を切ったり畑を開墾（かいこん）したりの力仕事に精（せい）を出します。

午後になると男たちは新しい家づくりを進めます。女たちは森で木の実や山菜（さんさい）を集めます。

海の潮の満ち引きを利用して魚とりの仕掛けをしてあるので、引き潮（しお）の時には忙しくなります。男も女も海に出ます。たくさん捕れた魚を生きのままに入れておくイケスという潮（しお）だまりもあります。

サイタ村では森からも海からもたくさんの食べ物を捕ることができました。山の中のサク村では十年くらい前からサケが川に上ってこなくなってしまう、食糧に困るようになっていました。それが新しい村へ移るきっかけになったのです。新しいサイタ村の南側には毎年サケがたくさん上

る川がありました。サケは塩漬けや燻製（くんせい）にして保存することができるので、本当に貴重な食料なのです。

村の一日で一番ほっとするときは夕方でしょう。男たちはたいてい海辺に集まって、たき火をし、酒を飲みます。焼きたての新鮮な魚やイカがおいしい食事になるのです。女たちはどこかの家に集まっておしゃべりをします。子供たちは暗くなるまでいろいろな遊びに夢中です。

「おーい、タケル。そろそろ帰ってこい」

タケルの父のマサトが大きな声で、海の中にいる子供たちに声をかけました。

「わかったよ」とタケルが返事をします。

「サトシもいい加減にしろ。母ちゃんが心配するぞ」とサトシの父のマサヒコも上機嫌（じょうきげん）で叫んでいます。

海の上ではタケルとサトシとソランが太い竹を何本も並べて作ったいかだで遊んでいるのです。近くにある岩場まで何とかたどり着こうと三人の子供たちは竹ざおを手にして奮闘（ふんとう）していました。犬のジミーがいかだの上を走りまわっています。

岩場の向こうは海が急に深くなり、潮の流れが速くなるので子供たちが行くことは禁じられていましたが、岩場までは浅い海が続いていました。引き潮の今は子供たちでも足が海の底に届くほどの深さしかありません。

「ははは。ソラン、落ちるなよ。まだ水は冷たいぞ」

タケルがソランの様子を見て笑います。

「大丈夫さ」

ソランは竹ざおを海の底につけてグイッと力まかせに押しました。いかだが急に進みます。

「おととと」

タケルとサトシはいかだの上にしゃがみこみます。ソランは竹ざおを抜こうと力を込めて引いたのですが、抜けません。ばしゃん。あわてたソランは海の中に落ちてしまいました。

「やったぜ！」

「墜落（ついらく）！」

タケルとサトシが大声で笑います。ずぶぬれのソランも、浅い海の中に胸までつかりながら笑いました。子供たちも海岸の男たちも、みんなおなかがよじれるほど笑いました。犬のジミーはい

かだの上でソランを心配そうに見ていました。

☆

「ははは、ソランは海に落ちちゃったね。寒くないかな」

空歩は毛布にくるまりながら言いました。

母の智子もほほえみながら言います。

「あのね、ソランたちがいる海は今では、陸地になっているのよ。むかしは今よりも海の水がずっと上のほうまで来ていたのよ」

「ええ！ そうなの？」

「そうよ。今、空歩と私のいるこの家だって、むかしは海の中だったのよ」

「ほんと？ じゃあこのへんにも魚が泳いでいたんだ」

「そうなのよ。タコさんやイルカさんだって泳いでいたのよ」

「ええ！ ぼく、泳げないから、おぼれちゃうよ！」

その夜、空歩はまた、夢を見ました。

泳げタイヤキ君になった空歩が、海の中をうれしそうに泳いでいました。ももいろサンゴたちが「がんばれー」と応援（おうえん）してくれました。

9 父の形見（かたみ）

9 父の形見（かたみ）

ソランはサイタ村の北の海岸で、砂鉄（さてつ）を集めています。村長のダビドが、ソランの母のトモと一緒にサク村に行っている間に、砂鉄を集めることがソランにまかされた仕事なのでした。ダビドは大事なマグネ石を、特別にソランにあずけたのです。木をくりぬいて作った箱には、砂鉄がもうたくさん入っています。

「ジミー、じゃまするなよ。砂鉄が落ちちゃうよ」

犬のジミーはずいぶんと大きくなりましたが、まだまだ遊びたくてしかたのない子犬です。うっかり目をはなすとマグネ石にかみついてしまうのです。それだけは決して、してはいけないことなのでした。マグネ石は村長のダビドが父親からゆずり受けた貴重（きちょう）なものなのです。

夏が近づいた浜辺にはハマヒルガオが、丸い深緑（しんりょく）の葉の上に、ラッパのような形をした薄いピンク色の花をたくさん咲かせています。イソスミレのかわいい紫の花と、ハマハタザオの白い花も浜辺を飾（かざ）っています。大きなイソガニを見つけたジミーが盛（さか）んに吠（ほ）えています。カニは少しもいそがずにゆっくりと浜辺を散歩しています。

何かの鳴き声でしたので、ふり向いたソランの目に、大きな動物の姿が映（うつ）りました。それは珍しい、灰色のたてがみをなびかせた白い馬でした。馬の背には母のトモが、うれしそうにまたがっていました。

「ソラン、帰ったわよ」

「母さん！ 馬だ！ 馬に乗れたの？」

「帰り道で練習したのよ。あんがい簡単ね！ ハイヨー」

「母さん、ハイヨーって何？」

「この馬の名前よ」

トモは馬を下りると、手綱（たずな）をソランに手渡ししながら真剣（しんけん）な顔で言いました。

「ハイヨーは、ソランのお父さんのトクが若いころに乗っていた馬なのよ。わたしと結婚するときこの馬をサク村に置いて行ったの。でも今はお前の馬よ、ソラン」

後から歩いてきた村長のダビドがまじめな顔で言います。

「それにこの美しい剣（けん）もソランのものだ。お前のお父さんが大切にしていたものだ。ト

モを嫁にもらうときに、この剣もトモの父親に差し出したのさ。持っているものをすべて置いていったらしい。トモを本当に愛したのだな」

ダビドはほほえみながらソランに剣を渡しました。剣の持ち手のところには紫色のひもが巻いてあり、柄（え）のところに輝く宝石が埋め込まれています。皮でできた鞘（さや）にも、赤や青や緑の宝石が一行に縫（ぬ）い付けられています。ソランはそっと剣を抜いてみました。青銅（せいどう）の両刃（もろは）の剣でした。

「きれい」

ソランはじっと剣を見つめました。父の姿が目には浮かび、急に涙がこぼれました。父にもう二度と会えないなんてとても信じられません。トモもソランの肩に手をまわして目に涙をいっぱいためていました。

☆

「ソランのお父さんも死んじゃったんだね。でも、復活（ふっかつ）するんでしょ？」
空歩は、病気で死んでしまった優しいお父さんのことを思い出してしまいました。

「そうよ。聖書（せいしょ）に書いてあるわ。神様は良い人も悪い人も、楽園（らくえん）で復活させてくださるってね」
お母さんの智子は、ほっぺたにキュッとえくぼを作って言いました。

「悪い人も復活するの？」

「そうよ。神様をよく知らないで、悪いことをして死んでしまった人たちにも、もう一度、神様を知る機会（きかい）をくださるのよ」

空歩は気がかりなことをたずねました。

「ぼくのお父さんは、良い人だよな？」

「と一っつても良い人よ。はやく会いたいわ」

智子は目を閉じて静かに下を向いていました。

空歩にはわかっていました。お母さんは、お祈りをしているのだって。

10 同盟

夏がやってきました。蝉（せみ）の音がうるさいほどに聞こえます。サイタ村では新しい家を急いで立てています。秋にサケが近くの川を上り始めるころまでに、できるだけたくさんの家族がサク村から移ってくることになっているのです。

そんな忙しい日々の中、サイタ村の村長のダビドは親友のハヤトと、トモとソランを連れて遠出をしました。冬の間にはトモとソランがお世話になったフジミ村を訪（たず）ねたのです。

ダビドは、きれいな宝石が十個つなげられている首飾りをかけています。額には四角い小さな箱がひもで縛られていました。ダビドが大切な用事で行くときの装いです。

鉄の斧（おの）や鍬（くわ）が何本も、馬のハイヨーの背にのせられています。フジミ村への贈り物としてダビドが作ったものでした。ソランも時々ハイヨーにのせられました。子供の足ではフジミ村まで歩き続けることは大変なものでした。

久しぶりに見るフジミ村は夏の緑の木々に囲まれていました。冬の間、葉の落ちた木々の茶色い姿からは想像もできないくらい豊かな緑の中にありました。

ダビドたちの一行を迎えてフジミ村の人々が大勢集まりました。トモとソランが帰ってきたという知らせがすぐに皆に伝わったからです。

ユーカおばあさんは相変わらず元気です。トモを抱き寄せて笑いながら涙をいっぱい流しました。

「二人とも無事で良かったのう。神様のおかげだのう」

背高（せいたか）ジロウおじいさんも「ほーい、ほーい」を連発して喜んでくれました。

友達のマサトやカツヤたちはソランを囲んで「熊の子」踊りを始めました。

サイタ村とフジミ村はこの時以来「同盟」を結びました。それは、お互いに助け合っていこうという約束のことです。サイタ村は鉄や青銅などの金属の作り方や、山で身に着けた暮らしの知恵を教えることができますし、フジミ村は海での漁の方法や船の作り方を教えることができます。そして万一、どこかの村との戦争が起きるならお互いに助けあうのです。

お互いの村の村長たちが話し合っている間にソランとほかの四人の子供たちは馬のハイヨーを連れて海辺に来ました。

「俺も乗れるかな」とマサトが興味しんしんです。このあたりでは馬は珍しい動物なのでした。「うん。すぐに慣れるさ。ぼくもまだあんまりうまくはないけどね」

ソランはマサトを自分の前にのせてハイヨーにまたがります。子供たちの背の高さでは直接、馬の背に乗ることはできないので、海辺の岩の上から乗り移るのです。

「進め」といソランの合図でハイヨーはゆっくりと歩き始めました。「止まれ」という合図ではぴたりと止まります。ソランが「走れ」という号令をかけたときにハイヨーは勢いよく走り出しました。海辺の広い砂浜はハイヨーにとってもめったにない良い場所だったのでしょう。びっくりするほどの速さで駆け抜けました。銀色のたてがみが風になびきます。

ソランとマサトは恐くなって夢中で鞍（くら）にしがみつきました。ハイヨーはすぐにゆっくりと走るようになりました。慣れてきた馬上の少年たちは楽しくなって叫びます。

「ヤッホー」

「ヤッホー」

砂浜で見ていたカツヤとタロウとトシも口々に叫びます。

「僕ものせてよ！」

「次は僕だよ！」

全員が順番にハイヨーに乗りました。ハイヨーも少し疲れてきたようです。あまり早く走らなくなりしました。少年たちはすぐに次の楽しいことを考え出します。

「ねえ、泳がないか」

泳ぎが得意なタロウが海を指差して言い出しました。すぐにトシが答えます。

「よし、クジラ岩まで競争だ」

ソランは沖にある岩場を見つめました。冬の間、フジミ村にいた時には海で泳ぐことはありませんでしたが、子供たちの夏の遊び場になっているクジラ岩のことはよく聞いていたのです。子供たちはいっせいに海に向かって走り出しました。ソランも笑いながら後を追います。上着と草鞋（ぞうり）を脱ぎ捨てて褌（ふんどし）だけになって海に飛び込んだ少年たちは、おもいおもいの泳ぎ方でクジラ岩を目指します。ソランは母に教わった泳ぎ方です。両手を交互に前に出し、顔を水につけながら泳ぎます。泳ぎが上手なタロウが先頭になりましたが、すぐにソランは追

いついてしまいました。息を切らして一番先にクジラ岩に泳ぎ着いたのはソランでした。二番目のタロウをずいぶんと引き離していました。

「負けちゃったよ。ソランは泳ぎが速いんだね」

タロウは悔しがりながらも感心しているようでした。

「うん。泳ぎは母さんに教わったんだ。母さんは僕の二倍くらい早いよ」

「ほんと？　すごいな」

「えっ、ソランの母さんはそんなに早いの？」

三番目に泳ぎ着いたマサトも大きく肩で息をしながら言いました。

「うん。僕の三倍くらいかな。とにかく絶対に勝てないよ。母さんがバタ足だけでも、まだ勝てないんだもの」

「へえ、泳ぐところ見てみたいな」

「母さんは泳ぐのが好きだから夏はいつも海に出て泳いだり魚を捕ったりしてるんだ。魚とりの名人なんだ」

トシが横泳ぎでやっと岩までたどり着きました。ずっと遅れてカツヤがのんびりとした泳ぎでたどり着きました。

涼しい海風が、太陽に焼かれた五人の子供たちの肌をいやすように吹いていました。

「きれいだな」

誰かが海を見つめながらつぶやきました。

「きれいだ」と皆が口々に言います。

「この海のずっとむこうには何があるんだろうな」タロウが大きく息を吸い込みながら言いました。

「行ってみたいな」とトシが言います。

「でっかい舟を作ろうぜ」とカツヤが提案します。

「そうだな」とみんな。

「俺たち五人で行くんだ」とマサヤが胸を張りました。

ソランはすぐに言います。

「ねえ、あと二人、一緒に行ってもいいかな」

「誰だい？」

「うん、サイタ村で友達になったタケルとサトシだよ。タケルは勇敢だし、サトシは誰よりも知

恵があるよ」

「そうか、じゃあ、七人で行こう。約束だ。同盟（どうめい）を結ぼうぜ」とマサトがうれしそうに言いました。

「同盟か」

「いいな」

「いいね。なんていう名前の同盟にする？」

「子供同盟は？」カツヤが提案しました。

「なんか弱そうだな。それに俺たちもすぐに大人になるよ」とマサヤが答えます。

「七人の勇者同盟はどう？」タロウが名案だとばかりに叫びます。

「カッコいい。でも、もっと仲間が増えるかもしれないぜ」

「そうか」

「じゃあ、クジラ同盟がいいよ。このクジラ岩の上で約束したからさ」とトシが言いました。

「なるほど」と皆は同意します。

「だったらさ、勇魚（いさな）同盟は？」とソランが思いついた名前を言いました。

「おー」

少年たちの目にはクジラが悠然（ゆうぜん）と泳ぐ姿が浮かびました。クジラは大きくて勇敢な姿から「勇魚（いさな）」とも呼ばれていたのです。広い海に恐れを知らずに乗り出していく勇者たちの名前にピッタリでした。少年たちの胸に、まだ見ぬ未来への熱い思いが込み上げていました。

☆

「カッコいい。勇魚（いさな）同盟！」

空歩は大きな声で言いました。

お母さんの智子は、両手をそろえてクジラのしっぽのような形を作って、上下に揺らしながら、

「ばしゃん、ばしゃん、ばしゃん。クジラよ」

とおもしろそうに言いました。

「ほんとだ。クジラだ」

空歩もまねをして両手を動かします。

「バシャン、バシャン、おいらは大きなクジラだぞ。バシャン、バシャン」

その夜、空歩がどんな夢を見たのか、言わなくても分かるでしょう？

11 収穫の祭り

夏の暑さが弱まり、涼しい風の吹く季節になると、サイタ村の村人の数が急に増え始めました。サク村からの移住が始まったのです。

サク村では二人の若者が中心になって新しい家づくりを進めていましたが、十五ほどの新しい家が出来上がりました。まだ十分な数ではありませんでしたが、サク村のほとんどの村人が移り住むことができそうでした。足りない分はみんなで力を合わせればすぐに作ることができるでしょう。

トモとソランに与えられた家におじいさんとおばあさんが一緒に暮らすことになりました。おじいさんとおばあさんは娘のトモが息子を連れて無事に帰ってきたことを本当に喜んでいます。

「ソランは話し方が優しくて、父親にそっくりじゃのう。トクは勇敢（ゆうかん）な若者だったが、猛々（たけだけ）しいところが少しもなかったよ。むしろ無口な男だった」おじいさんのイチロウが、ニコニコしながら言います。ソランが可愛くて仕方がないようです。

イチロウは長年サク村の村長を務めてきたのですが、新しい村への移転が決まった時に、ダビデに務めを譲りました。今は年長者の一人として新しい村長の相談役になっています。

おばあさんのウメも思い出を話します。

「そうさなあ。そっくりさなあ。トモを嫁に欲しいと言って、わしらの家の前に座って三日も動かなかったのさ。じいさんがたわむれに、『村一番の相撲大将に勝ったらトモをくれてやる』といったのさ。ところが驚いたことにあっという間にトクが勝ってしまったのさ。あれにはみなびっくりしたよ。おとなしくて細い男が大男を投げ飛ばしたのだからなあ」

「父さんはぼくの村でも相撲が強かったよ」ソランは嬉しそうに言いました。

「いつか父さんを負かすことが、ぼくの夢だったんだ」

急に村人の数が増えたサイタ村の秋は忙しくてにぎやかでした。何より冬に備えて食べ物を集めて保存しなくてはなりません。畑で採れる作物はまだわずかでしたので、女たちは木の実を探して森の中を、働き者のリスのように歩きます。若い女たちの一団は海からの食物を手に入れるために一日中アザラシのように海に潜っています。男たちは家を作るための木を切って運んだり、村を住みよい場所にするための土地の整備に励んでいます。

村人たちがとりわけ喜んだのは、村の南側を流れる川にサケの大群がやってきたときでした。山の村ではほとんど取れなくなっていたサケが、この新しい海辺の村では好きなだけ捕ることができるのです。河口近くの広い浅瀬では子供たちでさえ簡単にサケを捕まえることができました。サケを保存するための特別な大きな家が必要になるほどたくさん捕ることができました。

秋が深まり、村を囲む森の木々が紅葉を始めます。白っぽい木肌ブナの木は小さな葉を黄色く染めています。コナラの木はどんぐりの実をたくさん生（な）らせて村の食べ物を増やしてくれます。なによりも、クリの木はとげとげのいがの中に大きな実を生らせて、村を豊かにしてくれます。

水の温度が冷たくなってきたので女たちが海に潜（もぐ）ることはできなくなりました。ソランの母のトモは残念そうです。トモは誰よりも海の漁が上手なのでした。誰よりも長く深く海に潜ることができますし、泳ぐ速さはまるでイルカのように。

森と海からの収穫がひと段落を終えるころになると、村人たちは祭りの準備を始めます。

村長のダビドが皆に向かって言いました。

「祭りは次の安息日から始まりますが、今年は特別に八日間の祭りとしたいと思います。神の祝福のおかげで今年はたくさんの収穫に恵まれました。サケがたくさん取れたので冬の間の食物に少しの心配もありません。祭りを存分に楽しみましょう。サク村からの移住も終わり、これからこの新しいサイタ村でみんながそろった暮らしが始まるのです。本当に落ち着くまでにはまだまだ何年もかかるとは思いますが、ゆっくりと村づくりを進めましょう。この村をすばらしい神の国としてゆきましよう。」

村の衆は、村長の言葉に大きくなずきました。

ソランは炭焼き小屋からの帰り道、丘の上から、新しいサイタ村を眺めながら考えました。

「父さん。ぼくはうんとがんばって立派な勇士になってみせるよ。きつときつと、平和な国を作るんだ。みんなが仲良く暮らせる国をね。そして、こんど父さんに会ったら、相撲でも負かすからね。うっちゃりさ」

眼下にあるサイタ村は、ソランの涙で水の中にある村のように、ゆらゆらと揺れていました。海も山も空も、遠く遠く広がって揺れていました。

☆

むかしむかしのサイタ村

みんなのみんなの夢の国
今でもあるよ ほらここに
自分の胸を 押さえてごらん
おめめを閉じて 見てごらん

虹の光の神さまに
きっと会えるよ
あなたもね
ほんとに会えるよ
わたしもね

お母さんの智子は体を揺らしながら、自分で作った歌を歌いました。

「かあさん、おもしろい」
空歩は笑い出しました。

でも心の中では思っていました。

ソランのように、ぼくも勇者になるんだ、勇者になってお母さんを守るんだ、そして、いつかお父さんに会ったとき、胸を張って、こう言うんだ。

「お父さん、おかえりなさい。お母さんを守ったよ」ってね。

ソラン

<http://p.booklog.jp/book/80688>

著者：金時 豆太郎

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kintokimame/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/80688>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/80688>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ